

小学校における外国語指導法の取り組み I

—授業の目標と指導と評価を授業改善へ結びつける—

English New Curriculum Challenges for Elementary Education I

— A report on Learning Objectives and Class Evaluation —

オチャンテ・カルロス

OCHANTE, Carlos

要旨

小学校における英語教科化が始まる 2020 年までに移行期間として、現在全国の小学校で様々な新たな取り組みが始まっている。その中でどのような授業（指導法）があり、授業体制における指導者の取り組みを調べた。対象となった学校では英語専科教員と外国語指導助手（ALT）の協力を得て著者とともに指導や授業作りなどの提案に関わった。本稿ではその取り組みを述べ、専科教員と外国語指導助手の役割を挙げ、将来的に英語指導にあたる学級担任の移行期間における英語準備も述べる。本稿では、小学校英語授業の具体的な実際を分析し、その目標と指導と評価を一体として捉え、その振り返りである評価に視点を当てて、小学校での英語科指導法の充実化を図ることを目的とする。

キーワード：小学校英語教科指導法、学習指導要領、外国語としての英語（EFL）

I. はじめに

2011 年以降、小学校における英語教育は「外国語活動」として、小学校中学年で実施されている。しかし小学校で英語教育が始まってから、英語の必要性がずっと論議されてきた。これまでの公立教育の英語教育の課題などについても、さまざまな議論が続いている。EU 諸国やアジア諸国の初等教育への英語教育導入と比較すると、日本の 2011 年度からの必修化は、遅まきながらというのが実際のところである（脇本、2013）。

これまで実施されていた「外国語活動」では、児童に英語に楽しく触れさせ、英語の音声や表現に慣れさせることを目的としてきたが、新たなカリキュラムでは簡単な文の構造を含んだ英語の文法も学ぶことになる。現在の移行期間中までに「外国語活動」として英語が始まっていたとはいえ、小学校での英語学習には、当初から課題が既に山積みであったことに言及したい。

英語教科化に対して新学習指導要領が強調していることは、「何を」「どのように」教えるのかということである。具体的には、児童が英語をどのように活用して、どのように表現できるかなどの外国語活用能力が求められる。

結果として、教員養成コースのある大学では、小学校における英語科の指導法を扱うことが求められている。新学習指導要領の開始に伴って、英語を教科として指導できる小学校教員養成が急務となっているのが現状である（熊田・岡村、2017）。現在の小学校教師の多くは、児童に英語を教える指導法を、大学で学んだ経験はほとんどないからである。

つまり、これまでに小学校の担任教員は英語を指導することはなかったために、英語の指導力不足が課題となっているのである。現在の小学校での英語は、コミュニケーション能力の育成を重点に置いている。そのため、指導をALTや専科教員だけに任せるのではなく、児童の実態を把握している学級担任が授業を行うことが求められている（吉村・吉田・今井・福島、2017）。児童の発達段階や学級の実態を最もよく知っているのは担任の教師である。児童一人ひとり、学級全体をどのように育てたいのかを意識した目標を持ち、それに合った英語科の実践が期待されているのである。つまり、担任ならではの授業づくりが、今後求められることになる。

これまでは、教師が一方的に指導を展開するなどの主導型・知識偏重型の授業が横行していたが、今後は子どもたちに自主的に英語を使って活動させたり、グループ発表させたりするなどのアクティブラーニング型授業が求められるということである。また、カリキュラムや単元構成においても、当然であるが学級の実情に応じたものでなければならない。学級・学校・地域の実態を考慮したカリキュラムが求められる。

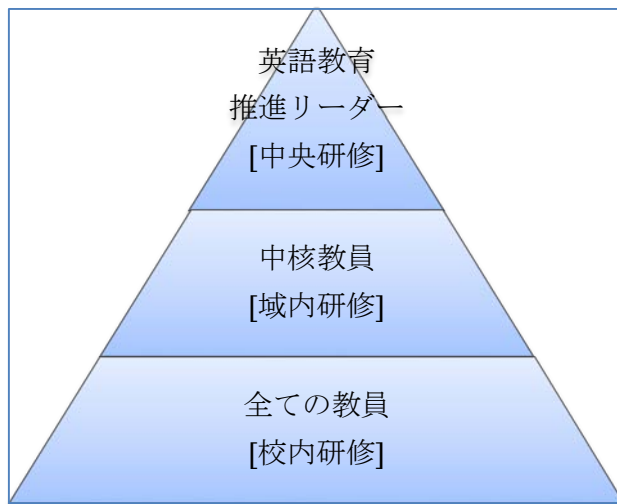
現在、全国レベルで小学校の教員を対象にした英語科教育指導法の研修や中学校の英語科との連帯が推進されており、教室では英語専科やALTのサポートで英語教育が行われている。

II. 小学校における英語教員の実態

小学校における英語教育は2011年の「外国語活動」で本格化し、それを機に全国各地の学校において外国語指導助手（ALT）の配置が始まった。ネイティブスピーカーの存在が、「英語に楽しく触れ、慣れさせること」をより具体化させ、彼らは英語の言語だけでなく、異なった文化を伝えるうえでも大きな役割を果たしてきた。

しかし今後は、小学校における英語が教科化され、学級担任の英語指導力が本格的に求められるために、様々な研修が実施されている。研修対象は英語教育推進リーダーから始まり、最終的にはすべての教員に行われるカスケード型である。その研修の構造を、図1で挙げている。また、研修は文部科学省が委託した専門機関（ブリティッシュ・カウンシル）のネイティブ講師による、オールイングリッシュの研修が実施されることが多い。

図1 英語教科化におけるカスケード型研修の構成



Ⅲ. 小学校5年生の授業の分析

(1) 対象学校

本稿で取り上げる小学校は岡山県にあるA小学校とB小学校である。どのケースでも対象学年は5年である。各学年における授業体制には学級担任、英語専科教員と外国語指導助手（ALT）で構成されている。

(画像1) 授業の様子



(2) 対象クラスの指導案についての考察

第5学年1組 外国語活動学習指導案

期日 平成30年6月4日

指導者 T1 英語専科教員

T2 外国語指導助手

1 単元名 She can run fast. He can jump high.

2 教材 We Can 1 Unit 5

3 単元の目標

- ・自分や第三者について、できることやできないことを聞いたり言ったりすることができる。また文字には音があることに気付く。
- ・自分や第三者について、できることやできないことを、考えや気持ちも含めて伝え合う。
- ・他者に配慮しながら、自分や第三者についてできることやできないことなどを紹介し合おうとする。

4 単元と児童

(1) 単元について

本単元では、全学年(Let's try)でならった「What do you like?」をふりかえながら、新しく導入する「I can～」、「I can't～」にふれる。移行期間中であるために教材の「Let's try」と「We can!」で移行期間において「外国語活動」で習ったことをこまめに復習しながら柔軟なカリキュラムマネジメントを行っている。

本単元の指導において、全て英語専科教員とALTのチームティーチング(TT)で行われている。英語専科教員は、中学校の教諭で英語教育に携わってきた指導経験者である。授業の展開における語彙導入でもピクチャーカードなどの教材を用いて、英語の発音やイントネーションにおいての工夫が行われるだけではなく、ジェスチャーなどの非言語的コミュニケーションスキルをうまく取り入れている(画像2)。専科教員と連帯しALTはネイティブスピーカーとして発音指導にあたることで児童から様々な英語の音になれることが実現している。ゲーム活動でも専科教員とALTのチームティーチング(TT)がうまく構成されていて、授業の展開が円滑にできていた。ALTは英語のネイティブスピーカーでも日本語もできるため、専科教員、学級担任や児童の様子を様々な角度から理解をすることが可能にしていることが伺えた。これは今後の外国語指導助手における養成ポイントとしても考えられる。

(画像2) 体で表現しながら新語彙を導入する様子



(2) 児童について (男子11名 女子12名 計23名)

「外国語」にむけた授業内容であることを前提にしているが、扱う活動には楽しく取り組むゲーム活動が含まれるために、児童が生き生きと取り組んでいる。男女の人数がほぼ同等のため、男女でペアが組まれている。なお、クラス人数は全体で23名である。外国語指導においては人数が少ないほど効果があるので、環境的に適切と考える。児童とALTのコミュニケーションも問題なく行われており、積極的に英語を話そうとしていた。

著者がゲスト講師として授業に関わった際にも、児童は、英語活動にスムーズに取り組むことができた。学校においての英語環境は、教室にとどまるものではない。学校内外のあらゆる場所で英語が表記されたり、ポスターなどが作成されたり、英語のクロスカリキュラムに実現されている。これには指導教員たちの日々の共通理解の様子と、子ども一人ひとりの実態を把握し、それに合わせた指導を進めている様子が伺えた。

5 本時の学習の展開

時間	学習活動	活動内容とめあて	教師の関わり・評価
5	1 Greeting あいさつをする 2 Warm up 復習	全体であいさつをし、専科教員とALT、それぞれ英語挨拶を児童とかわす。	ALTは巡回しながら専科教員とともに Warm Up を行う。

15	<p>3 Today' s Goal 前時で扱った単元の「What do you like」復習 本時のめあてであり「Can do, Can' t do」について知る。</p> <p>4 Pair Work ペアになって「What …do you like?」を使う。</p>	<p>リアクションペーパーで前回の学習を振り返りながら本時のめあてを理解する。</p> <p>導入された語彙を使って相手に聞いたりする。新しい語彙に慣れ親しませる。</p>	<p>専科教員が答えの確認などクイズ形式で行い、学級担任とALTが巡回しながら児童のノートをチェック。</p> <p>ペアの発表を行う。</p>
20	<p>5 [I can], [I can' t]の導入事例： I can Play the piano I can jump long</p>	<p>「できる」、「できない」が言えるようになる。児童同士でできることが同じパートナーを探すゲームをさせ、実践をはかる。</p>	<p>教師が自分のできることとできないことを簡単に発表し見本をみせる。</p>
5	<p>6 Closing 振り返りをする</p> <p>7 Greeting あいさつをする。</p>	<p>振り返りシートに習ったことや感じたことを書く。</p>	

6 授業の振り返り

授業の最初の挨拶は、ウォーミングアップとして、有効であった。特に3人の立場の異なる教師が、児童に関わるので、挨拶が一人一人できるのは効果的である。最初の5分間で、児童の緊張を解きほぐし、本日の学習への興味関心を高めていた。挨拶は、繰り返しの練習が必要なため、歌を取り入れて行うことも有効である。習慣化するためには、簡単なメロディーで同じフレーズが繰り返されるほうが、児童にとって覚えやすいであろう。小学校ですでに児童が学習し、良く知っている歌を替え歌にして使用するのも一つの方法である。

次に、授業の初めに、本日の目標を示している。教師が、本時の目標や評価の基準を把握していることは不可欠なことであるが、教師だけが分かっている意味がない。本時の目標を、児童も知らなければならない。そのためには、授業の初めに教師が、黒板にただ目標を書けばいいというわけではない。本時であれば、「できる」「できない」を言えるようになることが大きな目標であるため、その目標が児童にも分かるようなリフレクションシートを用意していた。リフレクションシートを活用することで、自然と本時の目標を児童と共有することが出来ていた。

また、本時の新しい「できる」「できない」の教材を提示する時に、「今日こんなことを学ぼう」と児童の前で、教師がデモンストレーションをして紹介をした。児童がそれを見て「やってみよう」と思えるような児童に身近な語彙やフレーズを選択し、デモンストレーションすることが重要である。本時の授業ではジェスチャーやALTとのデモンストレーションで、児童に視覚的な刺激を与えて、他教科との関連も考慮したカードも使用して、児童の興味関心を高めていた。新しい言語教材を導入する際には、児童の発達段階にあった十分なインプットをしなければいけない。意味が十分理解できな

れば、児童はその後の友達とのペアの活動に安心して入ることが出来ないからだ。例えば本時であれば、児童が学校生活の中で、最もよく味わっている「できる」「できない」事実を取り上げてもいい。

最後の振り返りシートに評価を書く場合には、「楽しかった」「よきできた」などの振り返りの感想の言葉を書くだけでなく、本時で友達とペアになって活動し話した内容なども思い出して書いていたのが良かった。友達が話してくれた内容を思い出して書くことは「相手の話をしっかり聞く態度」「話の内容を理解する」態度を身に付けることに繋がるからだ。

本時の指導案では、教師の児童へのかかわりや働きかけが具体的に書かれていたので、TTで授業する場合において有効であった。しかし、評価の欄に具体的な評価方法、例えば「活動・ワークシート・態度・発話」などが記載されていると、授業後の評価にさらなる共通理解がなされ、次の授業改善につながる評価として機能することになるだろう。

IV. おわりに

この学校の事例は、英語専科教員が配置され、その教員が全時間を担当している。そして学級担任がこの専科教員の指導も受けながら研修を重ねている。その結果、専科教員とALTの円滑な英語時間が展開する成果が見られた。著者が専科教員と教材作りの過程でも英語を使ってコミュニケーションをとる際にも、ALTも日本語でコミュニケーションがとれるという適切な環境が整っていた。このように、英語の専科教員の配置が急速に進んでいる中、地域によって人材の体制と配置の有無に差があるのが課題である。将来的に学級担任の指導力で英語指導を実現することが求められているが、これには教員への負担が大きく、学校における仕事の在り方を改善しなければ授業準備などに時間が不足すると懸念されている。地域によって、会議の数や時間を減らしたりすることで研修時間の確保を図っている。

上記のように、教師の仕事の在り方で懸念が示されてもいるが、小学校の英語教育で忘れてはならないことは、小学校教育は全人教育を目的としていることである。特に小学校では、知識の習得だけでなく体験的な学びと関連付けることで、自ら考える積極的な態度の養成が求められる。英語学習だけでなく他の教科と関連付けて総合的に学んでこそ、生きた知識となるのである。つまり児童は、外国語のコミュニケーション体験を通して「内容が伝わった」喜びを感じるが、一方で「伝わらなかった」体験からも多くのことを学ぶのである。なんとなく使用している日本語ではないからこそ、阿吽の呼吸で分かる同質文化でない相手でないからこそ、相手に分かってもらおうとする積極的な態度が育成されるのである。

小学校教員養成大学においては、英語科の導入を「母国語の発達の生涯になる」「教員の仕事の大変さになる」などのマイナス要素として捉えることもあると聞いている。しかし、何のために英語を小学校から学習するのかについての意義を、指導者である教員が理解できなければ、児童に指導することも困難になる。

大学における英語科の指導法の学習については、英語の知識や指導案の書き方なども重要であるが、まずは教員を目指す学生が、小学生が英語を学ぶ意味について実感することが重要である。

引用・参考文献

- (1) 熊田岐子・岡村季光 (2017) 「英語スピーキングに対する不安尺度作成—小学校英語の教科化に向けて—」奈良学園大学紀要第7集
- (2) 脇本聡美 (2013) . 「公立小学校での英語教育の現状と課題」『神戸常盤大学紀要第6号』, 1-7
- (3) 公益財団法人日本英語検定協会、小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査」総合編（国・公・私立小学校）対象（平成25年12月実施）
- (4) 吉村美幸・吉田朋世・今井信義・福島安希子(2017) 「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究 —担任が無理なく取り組める手法を探る—」福井県教育研究所研究紀要122号